文化

「沖縄処分」■（上）
―安倍政権による地方自治の破壊

水島 朝穂

憲法踏みにじる理不尽
辺野古警備「天安門」を想起

みずしま・あさほ　1953年東京生まれ。早稲田大学法学学術院教授。「ライブ講義　徹底分析！集団的自衛権」「18歳からはじめる憲法」「東日本大震災と憲法」など著書多数。97年から毎週「直言」を更新（http://www.asaho.com/）

昨年8月、沖縄ゼミ合宿（隔年実施で9度目）で名護市辺野古のキャンプ・シュワブに行った。県警の警備車両が止まり、1人が外に出て目立つように監視を続け、2人がビデオ撮影をしていた。この時は民間の警備員が前面に出て、機動隊の1個小隊が、基地内に停車した大型輸送車に待機していた。

昨年から今年にかけて、激しい対立は辺野古沖の海上だった。そこでの警備の主体は海上保安庁である。昨年の「直言」で、強圧的警備への転換についてこう指摘した。「安倍晋三首相の強い意向は、この海保の姿勢を転換させた。地元採用の多い11管区〔海上保安本部〕の職員たちにとってはつらい警備だったろう。力の対応には応援部隊が投入された（私が見たのは第2管区〔本部・宮城県塩釜市〕のそれ）。東北の隊員を投入して、強引にゴムボートに乗り移る「海上ごぼう抜き」の過剰警備を実施した。これも安倍首相が「早くやれ」と机をたたいたのでこういう流れになったようだ。

形だけの「要請」

2015年、この国の中央政府と沖縄県との対立は決定的となった。11月に入り、ついに警視庁機動隊2個中隊規模が辺野古警備に投入された。地元紙取材班のツイッターが、多摩ナンバーの機動隊車両がキャンプ・シュワブのゲート向かいに停車していると伝えた。多摩ナンバーなら立川市所在の第4機動隊か、調布市所在の第7機動隊だが、フロントガラス下に「4―6」とあるので、第4機動隊第6中隊の遊撃車Ⅲ型（ゲリラ対策車）だろう。

大学紛争時代に「鬼の四機」として知られ、重要局面で投入された精鋭である。1個中隊は約70人だから、辺野古には、第4機動隊の第6中隊ともう一つの中隊（もしくは他の機動隊からの選抜）が投入されたとみられる。強引な警備は、この夏の国会前デモ規制でも私自身が体験した。警備の現場ではなく、官邸の意向が働いていたのではないかと考えている。辺野古への警視庁機動隊投入も、県警の「要請」は形だけではないか。

11月4日朝、ゲート前にいるデモ隊に対して、従来の2倍の200人態勢で「ごぼう抜き」制圧に出たところである。正面には民間警備員が壁をつくり、その前で、孫くらいの年齢の都会の機動隊員が、おばぁたちを引き抜いている。ウチナーの隊員には、さすがにこれはできないだろう。海上も地上も、「ヤマト」の部隊を投入して強圧的な警備を実施した。

関心の薄い国民

これを見て想起したのは、1989年「六四事件」のとき、天安門広場にいた学生・市民に残虐な武力弾圧を行ったのが、彼らをよく知る北京警備部隊（第38集団軍）ではなく、中ソ国境を警備する第27集団軍（多くは北京語を話さない兵士たち）だったことである。いずこの権力者も冷酷で無慈悲なところがある。憲法を足蹴にするところも共通だ。楊尚昆と菅義偉の顔が重なってみえた。

日本国憲法の第8章「地方自治」は四つの条文からなる。まず「地方自治の本旨」は、国会の多数決では奪えない「憲法原則」である（92条）。その核心は、地方公共団体の長と議員を住民が直接選ぶという「住民自治」（93条）と、地方公共団体は国から独立して行財政を行い、条例という自主立法を制定できる「団体自治」である（94条）。そして、一の地方公共団体だけに適用される特別法については、当該自治体の住民投票を法律成立の要件とする地方自治特別法である（95条）。

こと沖縄に関する限り、この憲法の四つの条文はことごとく蹂躙（じゅうりん）されている。そのことについて東京のメディアはきわめて鈍感である。そして国民の関心も薄い。「沖縄のメディアは過剰に騒いでいる」と冷笑する「学者」もいる。

だが、もし同じことを、沖縄以外の46都道府県のどこかでやったらどうなるか。メディアも沸騰するに違いない。では、なぜ、沖縄でだけこんな理不尽が通るのか。

憲法の「住民自治」の観点からみれば、沖縄の民意は決着がついていることは明らかだ。世論調査を持ち出すまでもない。県議会議員選挙（2012年6月）、参議院選挙（13年7月）、名護市長選挙（14年1月）、名護市議会議員選挙（14年9月）、衆議院総選挙（14年12月）で、ことごとく辺野古基地反対派が勝利している。決定的なのは、14年11月の県知事選挙において、翁長雄志氏が圧勝したことである。

基地反対の民意

沖縄の民意はトータル、辺野古基地反対となった。この知事選後、中央政府、安倍政権の陰湿な「沖縄いじめ」は露骨さを増した。翁長知事が上京しても、首相も官房長官も会わないという異様な事態が5カ月も続いた。この陰湿さ、冷酷さ、姑息（こそく）さ、そして傲慢（ごうまん）さは安倍政権の際立った特徴である。かつての橋本龍太郎首相や梶山・野中両官房長官の沖縄に対する施策や対応について、「直言」でも厳しく批判してきたが、安倍首相や菅義偉官房長官と比べれば、彼らが何と人間的に見えることか。

県知事選から5カ月近くたった4月、菅官房長官は、那覇市内のいわく付きの場所に翁長知事を呼びつけた。沖縄の人々は激怒した。もしその場所の意味を知っていてそこを選んだのだとすれば、菅官房長官は本当にかつての米高等弁務官と同じ発想ということになる。

気鋭作家 写真の魅力伝授
那覇でフォトネシア沖縄

受講生が持参した写真作品について講評する石川直樹さん（左）＝14日、那覇市久茂地・タイムスビル

「フォトネシア沖縄」の写真学校が14、15の両日、那覇市のタイムスビルと那覇市ぶんかテンブス館で開かれた。写真家で作家の石川直樹さん、今年の木村伊兵衛写真賞を受賞した気鋭の石川竜一さん、川島小鳥さんらが講師を務めた。座談会も開いて、写真の魅力を考え、語った。

竜一さんと川島さんの2人は自身のこれまでの作品をスクリーンに投射して紹介。参加者の質疑に応じながら、撮影の背景などを語った。

その後3人が講師となり、ポートフォリオレビューを展開。受講生27人が持参した写真30～40枚を見て、それぞれの視点で、被写体との向き合い方や撮影者自身の姿勢、テーマ設定のあり方、構図、プリントの仕方などさまざまな角度からアドバイスした。

竜一さんの写真を見て、15年ぶりに写真撮影を再開したという宮寺朋也さん（36）＝石垣市＝は「国内の第一線で活躍している写真家に見てもらえるとても貴重な機会。参加できてうれしい」と話していた。

ポートフォリオレビューの優秀者に選ばれた新城愛さんは、金沢市のギャラリーSLANTで個展を開く権利を手にした。

ヤン・バニング写真展
インドネシアの日本軍「慰安婦」展

シンポ報告①　川田文子〈上〉

体験聞き取り「悲鳴」耳に

糸満市摩文仁の県平和祈念資料館2階・海と礎の回廊で開かれている「ヤン・バニング写真展　インドネシアの日本軍『慰安婦』」展（主催・同展実行委員会、23日まで）に合わせ、8日にオープニング・シンポジウムが開催された。作家の川田文子さん、ジャーナリストの金平茂紀さん、フリーライターの山城紀子さんが登壇し、戦時性暴力について各立場から話した。3人の報告を紹介する。

◇　◇

東京で10月に今回沖縄で開催された元「慰安婦」女性の肖像を展示した写真と同じ作品を紹介する写真展があった。その時、写真を撮ったヤン・バニングさんは、会場に来た人がこの女性たちに見つめられているように写真を撮ろうとしたと話をしていた。

確かに女性たちの眼光はものすごい。当事者たちと身近に接したものでなければ撮れない写真がたくさんある。私は元編集者で若いときに写真を主体とした雑誌の編集部にいたので、これを写真集にしたいと思ったぐらい、いい写真だった。写真家じゃないと撮れない写真だなと感じた。

ペ・ポンギさんに1977年12月5日に出会い、「慰安婦」問題がライフワークになった。きっかけは友人が高知新聞の切り抜きを見せてくれたこと。戦争中にぺさんが「慰安婦」として連行されたことが明らかになり、過去の経緯を考慮して「特別在留」を許可するということを報じた共同通信の配信記事が載っていた。

シンポジウムで登壇した（左から）金平茂紀氏、川田文子氏、山城紀子氏＝8日、糸満市・県平和祈念資料館

私は記事を読み、衝撃を受けた。この人の人生をきちんと記録すれば、日本と朝鮮、ヤマトと沖縄の近代史がたどれるのではという感じ方をした。しかし、ぺさんを前にしたとき、そんな観念的なことではこの人の人生を記録できないと痛感した。

ぺさんの話を聞くため、5年間沖縄に何度も通った。ぺさんは43年の晩秋、朝鮮人の通訳とコンドウという日本人が来て、南の島に行けばいい金儲（もう）けができると言われた。北九州の門司などを経由し、慶良間に連れてこられた。

10・10空襲後に「慰安婦」が各地に割り振られた。慶良間の座間味、阿嘉、渡嘉敷に関して言えば、たどれる限りたどった。その中で、渡嘉敷では「はるこ」という女性が1人亡くなっている。座間味では3人の女性が亡くなっている。

慰安所の利用は階級によって、時間が決まっている。将校は8時以降、宿泊も可。下士官は5～8時。一般は休日。兵隊の休みの日は、慰安所が非常に混雑した。兵隊はどっちが先かじゃんけんをしていたという。また、兵隊はズボンの裾さばきをよくするために長いひも（「ゲートル」と呼ばれる足に巻く脚半）で裾をくくっている。軍服を脱いで、ゲートルを軍人がはずしたらくるくる回す。時間がないから、着替えを早くできるように、ゲートルを巻くのが仕事だったと。この話を韓国のシンポでやったら、韓国のハルモニが「あたしもそれやったよ」と言っていた。

戦後のぺさんは、赤松戦隊の武装解除後、捕虜収容所に行く。その後、民間収容所を出た後、身一つで言葉も分からない。来る日も来る日も歩いた。日暮れになると、おなかもすいている。眠るところもない。寝る場所と食べる場所もない中でバラック建ての魚屋を探す。日本語が十分通じなかったと思うが、たどたどしい単語を重ねて手伝いで使ってくれと言うと、2階でサービスしてと言われる。体を売れということ。ぺさんも毎日歩いていて疲れて、舟をこぎながら（ウトウトしながら）客の相手をして、明るくなると居たたまれない。そこを出ていく。

私は「毎日同じことするなら、一つのところに居たほうがいいじゃない？」と言うと、ぺさんは「そこには居られない」と答えた。「酔客の相手をして体を売らなければならないようなところに居れるはずがない。居られないんだ」と。その声は悲鳴だった。（作家）

展覧会から

先人の技術確認 鮮やかな古典柄
『宜保聡紅型展

宜保聡紅型展が那覇市の青砂工芸館で29日まで開かれている。今年で8回目の個展で古典柄にこだわったという、約15点の帯地をはじめ、タペストリーや風呂敷、小物など計100点余を展示している＝写真。

復帰40年の節目に県立博物館・美術館であった王朝時代の紅型展に刺激を受け、古典柄を自身で模写し、再現することで先人の技術を確認した。花丸や葡萄（ぶどう）とリス、山頭などを彫って、鮮やかな色を差した。朱色が印象的で華麗で豪華な雰囲気を醸している。

ほか東道盆（とうだーぶん）、重箱など漆器をモチーフにした帯や筒引きで波しぶきをダイナミックに描いた帯「寿山福海」も。約2メートル×1メートルの大きなタペストリーには紅地に松竹梅や牡丹（ぼたん）、鶴亀を一つにまとめた。

「天描画」の世界 黒と白で緻密に
大城清太個展

製図用の0・03ミリのデザインペンで描く「天描画家」の大城清太の個展が那覇市の首里観音堂釈迦堂ホールで23日まで開かれている。

創作活動10周年を記念し、「WATCH&LISTEN」をテーマに10年を振り返り、大城が自身の内面と向き合って湧き出てきたイメージの制作に挑んだ。会場の「観音堂」に掛けて、「観」を「見る」、「音」を「聞く」の意味に重ねて、観音堂にある仏像を生かした空間構成となっている。

龍や鳳凰、赤子などをモチーフに線を一切引かず、繊細な点描だけで黒と白で幻想的な独自の世界観を表現＝写真。緻密な点の集合体で形や色の濃淡、質感を描写している。3カ月かけて10作品を制作した。ほか過去に制作した軸装の作品も飾られている。

魚眼レンズ

琉球史に自信持つ契機に

「クリフォード訪琉日記」（不二出版）の出版に合わせて、21日午後2時から、沖縄キリスト教学院大で出版記念講演会を計画するバジル・ホール研究会の沖田民行事務局長。「日本は鎖国をして外国船に攻撃したりしたが、琉球は力ではなく、外国とうまく交渉して尊敬されて帰した」と琉球の歴史を説明する。

「この10年で沖縄出身の芸能人が多く出るなど、沖縄の人々が自分自身にプライドを持つようになったが、歴史に関しては占領された悲劇の地という印象があり、コンプレックスが拭いきれていないのではないか」と指摘。

「琉球に誇れる歴史があることを示すのがバジル・ホールやクリフォードの存在。祖先を尊敬し、歴史に自信を持つチャンスになると思う」と話している。

唐獅子

馬の耳に…

久野　雅照

食欲の秋、に限らず、馬はよく食べる。放牧中の馬はいつ見ても、頭を垂れ地の草を食んでいる。

いつだったか、そんな馬たちの行動を24時間観察し記録したことがあった。彼らが食事に費やす時間は、なんと16時間。残りの時間は、立ったまま楽な姿勢でぼーっとしたり、たまにはごろりと横になったり。天敵のいない土地に生きる馬は幸せだ。

その昔、馬は生き延びるためにまず耳で異常な音を察知し、広い視野で敵を見つけ、速い脚で逃げた。その馬の耳には、馬の感情の一切が現れる。緊張すると馬の耳はピンと立ち、前に後ろに忙しく動く。怒ると耳は目がつりあがるほどにピッと後ろに倒れ、リラックスしている時にはだらりと横に倒れる。「聞き耳を立てる」とは馬の様子から来た言葉だ。そんな馬の気持ちを察しながら馬を眺めるのも楽しいものだ。

耳の話といえば、与那国島の広大な馬の繁殖地に放牧されている馬のなかには、耳に不思議な印があるものがいる。三角や四角、あるいはその複雑な組み合わせの形に、耳が切れているのである。いわゆる「耳刻（じこく）」である。

耳刻は馬の持ち主を表すもので、代々その家に伝わる形がある。今は少なくなったが、30年前にこの牧場から来た僕の馬にも耳刻はあった。僕はこの耳刻に興味を持ち、日本中の馬産地を調べて歩いたが、同じようなものはどこにもなかった。

ところで、インドネシアの東の外れにある小さな島、スンバ島にすごい馬の祭りがあると聞いて出かけた時のことだ。何百頭もの馬にまたがった戦士たちが二手に分かれて、馬を走らせながら槍（やり）を投げ合う「パソーラ」は、集落対抗の騎馬戦だ。槍が当たった戦士から流れた血が大地に滴り、五穀豊穣（ほうじょう）をもたらすという稲作文化圏の祭りである。これを見にスンバ島に渡り、20世帯ほどの小さな集落を訪れた時、集落内で木につながれている2頭の馬にこの「耳刻」を発見したのだった。この瞬間、何千キロも離れたスンバ島と与那国島の家畜文化がつながった。見ると集落内に放し飼いになっている豚やヤギにも「耳刻」があった。

僕が勝手に「馬楽」と呼ぶところの、こんな蘊蓄（うんちく）もたまにはいい。（ヨナグニウマふれあい広場代表）

2015・11・18

料理通異聞（124）

松井今朝子・作
いずみ朔庵・画

富吉が何をいいたいのかわからず、善四郎はおざなりな合いの手を入れた。

「ほう、何だってまたそう思ったんだ？」

相手は手酌を重ねて急に酔いが回ったように、伝法な口調でずっけりといった。

「何でって、お上人さんはあのお歳で身請けをなさるんだから、そりゃ御の字でござんしょうよ」

たしかに抱一上人は五十路を目前にして女を迎え、新たに所帯を持とうとしていたが、

「ありゃお上人様だからこそさ。ハハハ、同じ男と生まれても、俺なんざひっくり返ってあんな真似はできねえよ」

さらっと笑い飛ばそうとしたら、相手は却って向きになった。

「できるもんか、できねえもんか、やってみなきゃわからねえじゃねえか。やる前から尻尾を巻くなんざ男の風上にも置けないよ」

富吉の顔が赤いのは何も酒のせいばかりではなさそうだ。我慢しきれぬ気持ちがいっきに噴き上げて顔面を染め、口から飛びだそうとしているのがはっきりと伝わってくる。男の風上にも置けないのを承知の上で、善四郎は敢えてそれを聞くまいとした。

「お前さん、だいぶ酔ってるらしい。どれ、酔い覚ましの水でも持って来ようか」

と立ちあがりかけたら、相手はさっと着物の裾を押さえた。すぐに居ずまいを正してこちらに向き合う。

「どうぞ後生だから、ここで別れの盃を戴かしておくんなさい。あたしゃ今日できっぱり思い切るつもりだから、向後は廓でばったり会っても、なるべく知らん顔で通してくださいましな」

「何も、そこまでしなくったって……土台そりゃ無理というもんだぜ」

富吉はすっかり思いつめた表情だ。漆黒の眸は濡れ光りして、唇が震えている。唇の脇を飾ったほくろまでが揺れて見え、善四郎の心も大きく揺らいでいた。

今日まで自分が足繁く吉原に通っていたのは、やはりこの女のためだったのだ。それがもう会っても話すらできないとなれば、その切なさは想うだに胸が締めつけられそうである。かといってここまで女が思いつめたら、男はもはやなす術がなかった。

急に襖が開いてハッとする。近江屋の内儀が再び姿を現して、引き揚げ時を目顔で知らせていた。富吉にはお座敷がかかって、善四郎も店に戻らなくてはならない頃合いだ。

文化面へのお問い合わせは
☎098（860）3553
FAX 098（860）3484